### コスプレ声ちゃんの カプセルタワービルデイズ in 和歌山 2024年4月27日(土) ~ 6月30日(日)

エレベーターのリニューアル開館とあわせて、黒川紀章の《中銀カプセルA908》(1972年竣工)の内部公開を4月29日と5月5日に実施しました。昨年8月に展示しはじめてから初めての試みです。1日20組とし、友の会会員は先行予約を受け付け、一般予約は4月21日12時から開始したところ、数十分で受付終了。遠くは札幌から来て下さった人がいた一方、「前を通ってずっと気になっていたんです」という地元の人も多く、当日は予約者のあいまに短時間でもできるだけご覧いただくようにして、2日間で200人をお迎えしました。丸窓の向こうに見える和歌山城をバックに、写真係になって楽しんでくださる方々の表情を前にするのは嬉しいものでした。

そして同時に中銀カプセルタワービルの住人だった「コスプレ声ちゃん」による「カプセルタワービルデイズ in 和歌山」をリーディングコーナーで開催。これはカプセル2基からなる展示スペース「SHUTL」(東京)で昨年11月12日から19日まで開催された展覧会の和歌山版です。漫画やアニメ、特撮ドラマのキャラクターに扮してアニメソングなどのレコードを回し、マニアのあいだで知られる存在のコスプレDJ声ちゃんは、2018年から2022年まで中銀カプセルタワービルに住み、DJの配信をしていました。ビルの存続が危ぶまれるなか、やがて「中銀カプセルタワービル保存・再生プロジェクト」のコアメンバーとなり、保存運動のため「中銀カプセルタワービル」「メタボリズム」の文字を刺繍した特攻服を着て立ち上がったの







(左上/展示風景) (左下/運ばれるカプセル) (右/撮影する声ちゃん)

です。コロナ禍に見舞われた時期、老朽化したカプセルの不便さをも楽しみながら生活するユニークな住人たちとの交流や、全員退去となったあとの解体、再生の様子を、声ちゃんはiPhoneで撮影しつづけました。その数多くの写真は、声ちゃんの私的な記録であると同時に、いまや黒川の原点が詰まった作品として美術館に展示されるようになったカプセルの貴重な記録となっています。

「保管用」と貼り紙が付されたカプセルが、クレーンやトレーラーで運ばれる写真は、保存を願いながら見守る声ちゃんの訴えが聞こえてくるようです。約300点の写真パネルのほか、《中銀カプセルA908》とともにお預かりしている《建物表示板》や、当館の撤去したエレベーターから保存用として取り出された部品も合わせて展示しました。

最後になりましたが、声さんをはじめ、ご協力くださいました皆様に厚く お礼を申し上げます。 (井上芳子)

【出品内容】 ● 声《写真パネル[カプセルタワービルデイズ]》2018-2022:154点 ● 《写真パネル[カプセルタワービル解体デイズ]》2022:66点 ● 《写真パネル[カプセルタワービル再生デイズ]》2022-2023:68点 ● 《自立パネル》3点 ● 《ZIN》2021-2023:3点 ● 《キーホルダー[イラスト:山下メロ]》2020:1点 ● 《バッグ[ニットデザイン:編み物☆堀ノ内]》2024:2点 ● 《動画[解体・再生]》12分33秒 2024 ● 黒川紀章《建物表示板》1972 ● 『黒川紀章の作品』[装幀:粟津潔 ポスター・レコード付] 1970 ● 《シースルーエレベーター解体時に保存した部品》1994 ● studio 09《動画[和歌山県立近代美術館 エレベーター2号機(シースルーエレベーター)》2分46秒 2023 ● 渡辺和雄《カプセルA908支援のためのポスターデザイン(近日発売予定)》2024

#### MUSEUM CALENDAR

開館/9時30分~17時00分(入場は16時30分まで) 休館/毎週月曜日(祝休日の場合は開館、翌平日休館)

#### 2024年7月2日(火)~9月23日(月・祝)

#### コレクション展2024-夏 特集:旅する美術

特色ある当館コレクションを通して、幅広い美術表現をご紹介します。特集展示では、旅と美術表現との関わりをご覧いただきます。



川端龍子《芭蕉翁》1923年 当館蔵

和歌山県立近代美術館ニュース No. 119

編集発行: 和歌山県立近代美術館 〒640-8137 和歌山市吹上1-4-14

Tel. 073-436-8690 Fax. 073-436-1337 https://www.momaw.jp/

発行日:2024年7月12日 印刷:中和印刷紙器株式会社 レイアウト:株式会社和歌山毎日広告社

#### 2024年7月13日(土)~9月23日(月•祝)

#### なつやすみの美術館14 河野 愛「こともの、と」

美術館の楽しみ方を伝える展覧会の14回目は、 がか かい 河野愛をゲストに迎えます。近年のシリーズ「こと もの」を起点に、当館コレクションと組み合わせて、 さまざまな「こともの/異物/異者」を考えます。



河野愛 《こともの foreign object》 2021年 作家蔵 Photo: 増田好郎

#### 「メールマガジン」「Facebook」 「X(旧Twitter)」のご案内

メールマガジンでは展覧会の情報はもちろん、 講演会、トーク、ワークショップなど当館に関連する タイムリーなトピックスを定期的にお届けして います。当館ウェブサイトよりご登録いただけます。 またFacebookやX(旧Twitter)でも、最新の情報を 発信しています。あわせてご利用ください。

#### 友の会 会員特典いろいろ

- 1. 展覧会の無料観覧
- 2. 各種行事への参加 (美術鑑賞ツアー、ミュージアムコンサートなど)
- 3. 展覧会のご案内、美術館ニュース、その他情報の配布
- 4. 版画の頒布会への参加
- 5. 当館ミュージアムショップでの割引
- 6. 館内カフェでの割引
- 7. ホテルアバローム紀の国、湯処むろべ、 和歌山マリーナシティホテルでの割引

#### 入会のご案内

#### 一般会員 6,000円 学生会員 3,000円

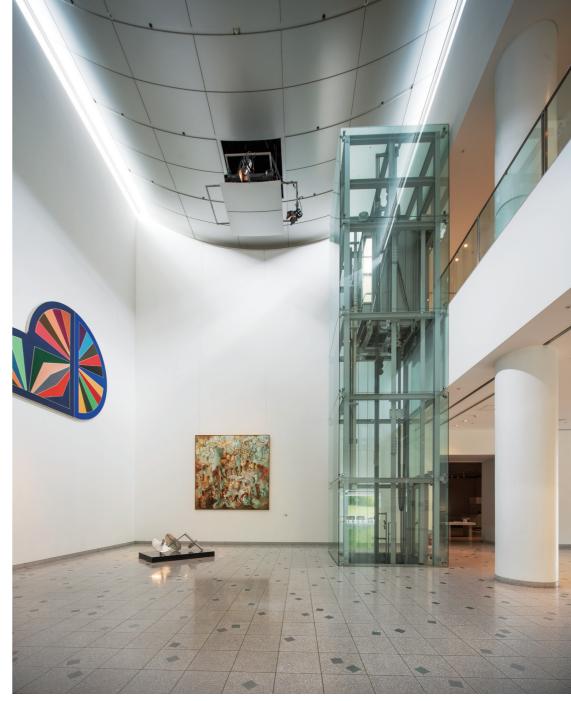
ミュージアムショップにてお手続きいただけます。 会員証即日発行。郵便振替でもお申し込みいた だけます。詳しくは友の会事務局まで。 Tel. 073-436-8690 担当:中川

和歌山県立近代美術館 👭



# MOMA Wakayama

2024 n°119



館内シースルーエレベーター(改修前) 2023年9月、長岡浩司撮影

## 上山鳥城男が描いた故郷の風景 《鳥屋城山》



図1 上山鳥城男《鳥屋城山》 1936年 油彩、キャンバス 有田川町立島屋城小学校旧蔵

2023(令和5)年の秋から冬にかけて、第2回和歌山県人会世界大会記念特別事業として、「トランスボーダー 和歌山とアメリカをめぐる移民と美術」展(9月30日-11月30日)を開催しました。本展では、特にカリフォルニアを中心とするアメリカ西海岸に注目して、明治期から日米開戦の時代までのあいだに当地をめぐって展開された、和歌山を中心とする移民の歴史とそこで展開された美術との関係を見直し、紹介することを試みました。

展覧会におけるさまざまな新しい発見のなかでも、これまでその作品をほとんど日本で知られることのなかった、現在の和歌山県有田郡有田川町出身の画家、上山鳥城男(1889-1954)を紹介することができたのは大きな成果でした。展覧会図録では、ロサンゼルスの日本人街リトルトーキョーを主として活動し、赫土社というグループの中心的な人物としても知られた上山に注目した経緯や、わかり得た上山の作品とその活動について記していますので、ぜひご覧ください。またアメリカでの調査などのいきさつも含めて、本誌117号でも青木加苗学芸員の報告がありますので、そちらもご参照いただきたいと思います。

この展覧会で紹介した上山鳥城男作品のなかで、日本国内から出品された唯一の作品が、故郷にて描かれた《鳥屋城山》【図1】でした。作品のタイトルに作者の名前と同じく「鳥」「城」という文字を持つこの作品に辿り着くまでの事情などを、ここでは書き記しておきたいと思います。

先に、上山が和歌山県有田郡有田川町出身であると書きましたが、その前身である鳥屋城村が上山の生地であったことも、展覧会の準備過程でようやくわかったことでした。手がかりにした『アメリカに生きた日系人画家たち 希望と苦悩の半世紀 1896-1945』(東京都庭園美術館、1995)や、『Asian American Art. A History, 1850-1970』(Stanford General Books、2008)などにも上山の経歴は掲載されていますが、出身地が和歌山であること以上は書かれていません。上山姓が多い紀中の辺りが出身地ではないかという予想をしてはいたのですが、それがはっきりしたのは、2022(令和4)年9月のロサンゼルスでの調査時のことでした。

上山が、戦後に妻の末と一緒にリトルトーキョーで始めた「文化堂 Bunkado」というギフトショップは、現在も親族によって経営されています。ここで、上山の作品やスクラップブックなどさまざまな資料を調査させていただくなかで、出生地に関する記述をようやく見つけることができたのでした。ひとつは、『上山鳥城男遺作回顧展目録』(1954年/「トランスボーダー展図録」 p.63に掲載)です。1953(昭和28)年に上山が亡くなった後、仲間たちによって開催された展覧会の目録には、裏面に上山の経歴が年表としてまとめられており、「一八八九年(明治二十二年九月廿二日)上山宗十郎三男として和歌山

縣有田郡鳥屋城村に出生」とありました。さらに、スクラップブックには、 『鳥屋城』第4号【図2】という新聞が挟み込まれており、これを開くと上山の 記事が掲載されていました。『鳥屋城』の発行所は「和歌山県有田郡鳥屋 城村 鳥屋城公民館」、編集兼発行人は「後安榮吉」、印刷所は「有田タイ ムス社」とあり、公民館が地域の情報を発信する新聞のようです。第4号は 1950(昭和25)年12月1日の発行で、12月に開催される鳥屋城文化祭に関す る話題が中心の号でした。この紙面の「学園の頁」というコーナーに、「アメ リカでも有名 郷土の美術家」として、上山が紹介されていたのです。 文末 に、「木村」と記名のある人物が、上山について書いています。「皆さん、この 額にはいつた鳥屋城山の画に見おぼえがありませんか。鳥屋城小学校の 新校舎のあの音楽室の眞正面に…」。この後の数行が紙面の皺のために 読めず残念なのですが、「この"鳥屋城山"を前に、校歌を歌つたなつかし の思出を新たにされることでしよう。この画の画家こそ、今日御紹介しようと するわが郷土のほこる美術家、在米の上山鳥城男氏なのです」と続きます。 『上山鳥城男遺作回顧展目録』と同様に、日本とアメリカにおける上山の足 跡を辿る上で、たいへん貴重な資料である同紙からは、上山が一時日本に 帰国していたという事実とともに、上山の母校である鳥屋城小学校に作品が 展示されていたこと、さらにモノクロながら掲載された図版によって、その絵 のイメージも知ることになったのでした。尤も調査の際には、膨大な資料を 撮影して記録することを優先したので、細部までその記事を確認したのは、日 本に帰ってからのことではありました。

1889(明治22)年に、明治期の町村制の施行によって生まれた鳥屋城村は、1955(昭和20)年には近辺の村と合併して金屋町となり、2006(平成18)年に吉備町、金屋町、清水町の合併により有田川町が発足して現在に至ります。上山の故郷について探るべく『金屋町史』にもあたってみました。下巻でまず目に入ったのは地元の篤農家として語られる「上山宗十郎」の名前です。そして、読み進めると最後の頁には、子どもたちについての言及があり、鳥城男についても「三男鳥城男は渡米して加州美術大学を卒えて、画筆をとって一家をなし、その麗筆を謳われ、作になる風景画は今も鳥屋城小学校の講堂に掲げられている」と記載されていたのでした。

音楽室の正面にせよ講堂にせよ、鳥屋城小学校に上山の作品が残っているのか確かめないわけにはいきません。有田川町教育委員会に電話をして、川口修実学芸員に伺ったところ、確かに上山の作品があると聞き、青木学芸員とともに有田川町に向かいました。小学校では、坂本利文校長が私たちを迎えてくださいました。現在の小学校は、元の場所から移転して2003(平成15)年に新築された校舎でしたが、作品は引き継がれて校長室に掛かっており、



図2 『鳥屋城』第4号 (鳥屋城公民館、1950年12月1日) 上山鳥城男スクラップブックに挟み込み



4 『昭和七年 学校沿革史 二巻』 (鳥屋城尋常高等小学校)昭和11年度の欄



図6 上山鳥城男《勝浦》1940年 油彩、キャンバス 個人蔵



図3 有田川町立鳥屋城小学校校長室にて



図5 鳥屋城山(筆者撮影、2023年5月15日)



図7 お蛇浦海岸(筆者撮影、2023年11月9日)

そこでようやく上山が描いた《鳥屋城山》と出会うことができたのです【図3】。

小学校で見せていただいた鳥屋城尋常高等小学校時代の『昭和七年学校沿革史 二巻』には、上山が小学校で個展を開催し、《鳥屋城山》を寄贈した経緯などについても記されていました。昭和11年度の欄【図4】に、「上山氏個展」として、「八月一日 本村中野出身上山鳥城男氏米国ヨリ帰省中ニツキ同氏ノ洋画三十点ヲ講堂ニテ展覧会開催ス 郡内各所ヨリ入場者多数 因ニ学校へ鳥屋城山ヲ寄附サル ソノ代リ静物リンゴヲカヤス」とあります。8月1日の1日限りの展示でしたが、講堂には洋画30点が展示されました。そして、作品裏面の木枠にある「寄贈 昭和十一年八月二日 上山鳥城男氏」という書込みからは、展覧会開催の翌日、8月2日には《鳥屋城山》が小学校に寄贈されたことがわかります。

現地に行ってみると、その地を見下ろす鳥屋城山は、村のシンボル的な存在であることをよく感じることができます。1889(明治22)年に誕生した鳥屋城村の初代村長である上山鳥城男の父、上山宗十郎はこの山から村の名を取り、「実に鳥屋城村の生みの親であり、この後親しまれたこの村名のその命名者であった。」(『金屋町史』)とされるのですが、この年に生まれた息子にも、「鳥」と「城」の文字を与え、「鳥城男」と名付けたのでした。少し変わった名前の由来はここにありました。

さらに幸いなことに、当地に住む上山の親族にあたる三輪塚蔵さん朝子さん夫婦とも、この日に知り合い、上山がここから絵を描いたと思われる場所にも案内していただきました。上山宗十郎の家は中野という地域にかつてありました(国道18号と424号の交差点附近)。その家の跡地から10分程歩いて行ったところ、鳥屋城山のおよそ北西に位置する白岩丹生神社の下方にある、五名谷川のほとりに佇むと、まさにこの方向から上山は鳥屋城山を眺めて描いていたのだということがわかります【図5】。描かれた当時とほぼ同様の山容を望むことができました。左方手前にある林やその奥の高台も、雰囲気は変化していますが残っています。おそらく上山は、山を望む際の遠近感

をより強調するためにこの構図を選択したのではないかとも思われました。 ところで画面には、山頂になにかぼんやりとしたものが描かれています。最初は塗り残しかとも考えたのですが、これは松の木であることも三輪さんに教えていただきました。しかし残念ながら現在は、松食い虫の被害により枯れてしまったとのことです。

上山は1908(明治41)年に渡米して以来、1936(昭和11)年に28年ぶりに帰国しました。その理由は、病気の父を見舞うためであり、またロサンゼルス美術協会の依頼により日本でアメリカの美術を展示する可能性を探る目的もあったようです。ともあれ、久しく離れた故郷で、自身の名前の由来ともなった山を描くにあたってはさまざまな想いがあったに違いありません。『鳥屋城』第4号の記事には、描かれた当時のことも記されています。「朝早く田の岸に立つて一心に画筆をふるつていられる上山氏を見かけることが続きました。こうして精魂こめた"鳥屋城山"が完成されていきました。あけぼの、朝もやにうすかすむ、あのおごそかな、それでいてやさしさを包んだ平和そのもの、"鳥屋城山"の名画が完成されたのです」。そして《鳥屋城山》は、「トランスボーダー」展に出品後、当館にご寄贈いただけることになりました。地域の財産を引き継ぐ責任を感じつつ、しかしこのコレクションは今後、上山を顕彰し継承していくための布石となることは間違いありません。

上山は約1年間の日本滞在中に、関東、関西、四国、九州と日本各地を旅行して、各地で風景を描き留めました。そしてアメリカに戻った後、それらのスケッチを題材に絵を仕上げているのですが、そのなかで和歌山を描いた作品《勝浦》【図6】の場所が、那智勝浦町の「お蛇浦海岸」【図7】であることも判明したので最後に示しておきたいと思います。海岸風景が、アメリカ西海岸と同じく入り組んだリアス式海岸であるところも興味深いところです。日本滞在時の上山の動きひとつ取ってもまだまだ調査すべき課題は多く、今後ともさまざまな方面から引き続き追っていきたいと考えています。

(奥村一郎)

2 | 和歌山県立近代美術館ニュース n°119 | 3

## もし原勝四郎が 東京美術学校で 学んでいたら

原勝四郎と同時代の画家たち 2023年10月7日(土)~12月24日(日)



展示風景 「原勝四郎のいた東京」(手前にオーギュスト・ロダンの彫刻、右に保田龍門、恩地孝四郎、正面右から 岸田劉生、高村光太郎、萬鐵五郎らの作品)

#### ■はじめに

昨年10月から12月にかけて開催した「原勝四郎と同時代の画家たち」展 (以下、同時代展と略)は、同時期に開催した「原勝四郎展 南海の光を描く」 (以下、原勝四郎展と略)の関連企画として、当館コレクションを中心に、田辺市 立美術館や個人所蔵家からの借用作品を交えて構成しました。原勝四郎 (1886~1968)は、現在の和歌山県田辺市に生まれた洋画家です。その回顧 展開催に合わせ、原とつながりのある画家の作品を交えながら、洋画を中心 とした同時代の美術を紹介することで、その生涯と表現を時代のなかに位 置づけてご覧いただくことを意図しました。

展示は原の生涯に沿って、「原勝四郎のいた東京」、「原勝四郎の滞欧前 後」、「原勝四郎の帰国後」の3章で構成しました。まず「原勝四郎のいた東 京」で紹介したのは、原が和歌山県立田辺中学校在学中に画家を志し、二 度の上京を経てフランスに赴くまで、およそ明治時代中期から大正時代中 期にかけての東京を中心にした美術動向です。東京美術学校西洋画科設 置時からの指導者であり、洋画団体、白馬会の中心人物である黒田清輝と 久米桂一郎をはじまりに、原が兄事した山下新太郎ほか、原よりも先に渡欧 した梅原龍三郎や有島生馬、そして東京での活動期間が重なる岸田劉生 や萬鐵五郎、恩地孝四郎や保田龍門など、原と近しい世代の画家の作品を 続けました。

次の「原勝四郎の滞欧前後」では、原がヨーロッパに滞在した1917(大正6) 年から1921(大正10)年の前後、同様に滞欧した青山熊治、長谷川潔といっ た日本人画家と、アンドレ・ロート、藤田嗣治ら同地で活躍していた画家たち の作品を紹介しました。最後の「原勝四郎の帰国後」では、原が帰国以降、 終戦の直前まで、年に一度作品を発表した二科展への出品作品や、若い頃 から交流のあった熊谷守一、戦後二紀会への参加を促した鍋井克之ら、関 連する画家たちの作品を紹介しました。全体では38作家44点、資料1点に よる構成でしたが、所蔵家のご協力により、戦前の洋画史を概観できるほど の充実した出品内容とすることができました。

今回、ふたつの展覧会を同時に組み立てながら考えていたのは、特にその 若い頃、もしほんの少し状況が違っていれば、原は画家として全く別の形で 活躍していた可能性があるということでした。もちろん歴史に仮定を持ち込 み始めるときりがないのですが、そこで想定される別の未来を考えることで、 原とその活躍した時代の美術がより豊かに見えてくるようにも感じられまし た。そこで本稿では原の若き日、二度の東京美術学校退学を含む在京時 代に絞って、もし原が同校に通い、学んでいたらと想像を膨らませながらふり かえってみたいと思います。

#### ■東京美術学校でともに学んだかもしれない人たち

1886(明治19)年、田辺で呉服屋を営む裕福な家の四男として生まれた原 は、和歌山県2校目の県立中学校として自宅近くに開校した和歌山県第二 中学校(在学中に和歌山県立田辺中学校と改称)に入学します。同校にはさらに高 等学校等への進学を考えることのできる、和歌山県南部地域を中心とした 有力な家の子弟が集まっていました。原はそこに入学できる恵まれた環境

兄の原保吉が画家を目指して絵を学んでいたこともあり、弟の勝四郎も田 辺中学校在学中に美術への関心を深めます。さらにそこへ東京美術学校 西洋画科の第一期生である田中寅三が赴任してくるという幸運も重なりま した。その指導を受けた原は、同校への進学を目指します。1905(明治38)年 に上京すると、翌年には晴れて同校の入学試験に合格、20歳の青年の前に は洋々たる未来が広がっていました。

しかしながら、原は予備科の修了試験を経て7月に本科への進学を許可 されたものの、進学手続きを取れずに帰郷を余儀なくされます。兄に代わっ て家業を継承することを求められたためでした。1906(明治39)年7月26日付 けの『官報』6922号には、原と同時に本科進学を許可された73名が掲載さ れています。日本画科には同郷の楠本秀男がおり、西洋画科には大野隆徳、 小寺健吉、横井礼以、金工科には小絲源太郎といったのちに活躍する洋画 家の名前が見られます。もちろん同期生全てが順調に勉強を進められた訳 ではなかったはずですが、明るい希望を抱く彼らの前から去らねばならな かった原の気持ちは察するに余りあります。

1909(明治42)年、許されて再び上京した原は、翌年東京美術学校西洋画 科に二度目の合格を果たします。この時24歳になっていました。今度は予備 科を修了後に本科へと進みますが、2年次には進級しませんでした。同年 10月東京音楽学校選科に入学しますので、それまでに退学したと考えるの が自然でしょうか。その確かな理由は分かっていません。結局原は、憧れを 抱いた同校で本格的に学ぶことはありませんでした。

1910(明治43)年4月7日付けの『官報』8034号には、同期の合格者が掲載 されています。西洋画科には大久保作次郎、恩地孝四郎、高間惣七らのほ か、恩地と同様に版画家として活躍する及川康雄の名前があります。図画 師範科には、関西の創作版画界で重要な役割を果たす武田新太郎の名前 も見られます。

さらに原の一度目と二度目の合格の間の主な入学者を挙げてみます。 1907(明治40)年は、日本画科に小出楢重と廣島晃甫、西洋画科に片多徳郎、 熊岡美彦、佐藤哲三郎、平井為成、御厨純一、山下鉄之輔、萬鐵五郎、彫刻



展示風景 (左上)「原勝四郎のいた東京」(右に黒田清輝、久米桂一郎、正面に山下新太郎、有島生馬、梅原龍三郎らの作品)

- (右上)「原勝四郎の滞欧前後」(右に藤田嗣治、長谷川潔、正面中央に青山熊治の作品)
- (左下) 「原勝四郎の滞欧前後」 (右にアンドレ・ロート、モーリス・ド・ヴラマンク、正面に保田龍門、東郷青児ら、左に佐伯祐三と川口軌外の作品)
- (右下)「原勝四郎の帰国後」(右に小出楢重と赤松麟作、正面に佐伯祐三、鍋井克之ら、左に原勝四郎と熊谷守一の作品)

きたむらせいぼう さいとうそがん たてはた たいむ 科に北村西望、齋藤素巌、建畠大夢、図案科に今和次郎、などと多彩です。 1908(明治41)年には、西洋画科に牧野虎雄、図案科に広川松五郎、1909年 には西洋画科に遠山五郎、鍋井克之、鋳造科に高村豊周らがいます。ここ に名前を挙げた美術家とは、もし原が東京美術学校で学んでいたら親交を 深め、あるいは活動をともにしていたかもしれません。

#### ■田端での交流

原は二度目に東京美術学校を退学した後も、1916(大正5)年に帰郷する まで東京で暮らしました。その間、上記のなかには、学校を通じてのつなが りは生まれなかったものの、直接交流を持った人物もいます。原が東京で 暮らしたのは、兄の保吉が借りる田端の家です。兄は『都新聞』の挿絵画家 となって生計を立てていました。東京美術学校のある上野から近い田端の借 家には、田辺中学校の後輩で同校に通う楠本秀男が、一学年下の小出楢重 やその友人で東京音楽学校に通う信時潔らを連れて訪れ、原も親交を結び ます。信時を通じて、その友人である熊谷守一とのつながりも生まれました。

田端文士村、あるいは田端文士芸術家村という呼称が生まれたように、 田端には明治時代半ばから昭和の戦前にかけて、芥川龍之介など多くの文 筆家と板谷波山など多くの美術家が暮らしました。原が展覧会でその作品 を見て感銘を受けた山下新太郎も、留学から帰国したのち、1911(明治44) 年にアトリエを同地に構えたことで原は訪ねる機会を持ち、長らく兄事する

なにより近くに住んでいたのが、小杉放庵(未醒)です。小杉は1908(明治41) 年に原兄弟の暮らす借家の道を挟んだ向かいの広い敷地に、アトリエ兼自 宅を新築して転居してきました\*1。この年、小杉は山本鼎らが前年に創刊し た美術文芸雑誌『方寸』に同人として加わりますが、その山本も1911年に 田端に転居してきます。翌年7月に山本は渡欧、12月末に小杉も続き、ふ たりは1913(大正2)年の多くをともにパリで過ごしました。同年11月、先 に帰国する小杉は、山本から従弟の世話を頼まれます。その従弟というの が村山槐多です。翌1914(大正3)年7月、村山は小杉邸敷地内の借家で、

水木伸一とともに暮らし始めました。 村山が小杉家を離れるのが1916年春 頃、原兄弟が帰郷するのは同年6月です。原と小杉や山本、また村山とのつ ながりはいまのところ確かめられていませんが、田端での交流についてもさ まざまな想像は膨らみます。

#### ■おわりに

帰国した原は田辺へ戻り、1931(昭和6)年からは隣町の白浜で妻と娘と暮 らして、同地の風景と自分を含む家族の肖像、そしてバラを主とする静物と いった身近なモチーフのみを描き続けました。生涯ほぼ県外に出ることな く、作品を発表するのは年に一度、戦前は二科展、戦後は二紀展に作品を 送るのみ、という画家人生を送ります。

もし原が東京美術学校で学んでいたらと想像が広がったのは、原の在京 期間である明治時代の後半から大正時代の半ばにかけてが、日本の近代 美術の大きく動いた時代であるからです。上記に挙げた人物たちに限って も、それぞれが東京を中心に興味深い活動を行っており、原はその現場近く にいました。そして、場合によっては、その活動に関わっていた可能性も考え られます。実際には画家として恵まれた前半生を送れなかったかもしれませ んが、その時代の空気を感じていたことは、原にとって大切な経験となって いるにちがいありません。

残念ながら、原の東京時代の作品は確認される数が少ないため、表現の 上で影響関係やつながりを考えることには困難がともないます。滞欧時代 を含めた人的な交流については、原に関わる資料から分かったこともある一 方、同時代の美術家の側から思わぬ出会いが見つかる可能性もあります。 今後も田辺市立美術館とともに注目していきたいと考えています。なお、原 勝四郎については展覧会図録\*2に生涯と作品をまとめています。

(宮本久宣)

- \*1 『池田諒遺稿「原勝四郎のフランス放浪日記 | 、田辺市立美術館、2007年、pp.179-188に 「田端芸術家村」という節題で、田端でのことがまとめられています。
- \*2 『原勝四郎展 南海の光を描く』展図録、和歌山県立近代美術館・田辺市立美術館、2023年。

4 | 和歌山県立近代美術館ニュース n°119 和歌山県立近代美術館ニュース n°119 | 5



エレベーター改修工事と 黒川紀章の「近代」

図4 シースルーエレベーター内部の鏡と乗り場床のテラゾー(改修後)

美術史家の鐸木道剛氏の言葉を、折に触れて思い出す。深遠な学問か ら結論めいて導き出される言葉のひとつに「近代化とは可視化です」という のがあった。たとえば電柱である。かつて鐸木先生を頼って岡山大学図書 館に収蔵されているドイツの美術雑誌『Jugend』を閲覧させていただいたこ とがあった。その帰途、大学の構内を歩きながら、その言葉を聞いたのだっ たが、当時、街の景観をよくするためにあちこちで電柱や電線を地下へ埋設 する工事が進んでおり、それと関連して、電線が貼り巡らされて見えるのは 近代の象徴であり、「あるもの」を地下に埋め、見えなくするのは反近代的な 行為である、と言うのだった。

いっぽう黒川紀章氏は、近代を「機械の時代」と述べ、和歌山県立「近代」 美術館を設計した時、構造や機械を見せることをデザインのモチーフとした。 近代の象徴としての機械の可視化である。たとえば建物の内部に入って見 える庇や、構造桟が露わなミュージアムショップの天井、シースルーの自動ド ア、エレベーターなどである。エントランスホールに置かれたシースルーのエ レベーターは1階と2階を行き来するためだけの、エレベーターとしては小さ い物だが、黒川はそれを世界にひとつしかない近代を表現する作品にした。 隣接する県立博物館のエレベーターはシェルターのような筒で覆われてお り、比較するとその意図は一層明確に感じられる。

しかし1994(平成6)年の竣工から約30年となろうとする頃、2022(令和2) 年にメーカーの部品供給が終了することになり、4基あるすべてのエレベー ターを改修しなければならなくなった。世界でひとつしかない「作品」として のエレベーターも公共建築としてはその例外ではなかった。建設時から「黒 川紀章の代表作「文化財級の建物」と評されてきたこの建築を、黒川紀章 氏亡きあと、美術館としてどこまで大切に保存していけるか、ということでもあ

る。黒川紀章建築都市設計事務所の監修によって設置当初の設計意図や デザインをできるだけ残すという方針が明確に立てられたが、現在の技術や 予算で実現するには、関わる人々の理解と努力が必要なだけでなく、乗り越 えるべき課題がたくさんあった。ここでは特に変化した部分を記しておくこと

改修前はガラスの中で上下するエレベーターの背面で油圧式のシリン ダーの動きが見えた。しかしまずこの機構そのものを変更しなければならな かった。竣工当時、ロープ式のエレベーターは屋上に機械室を設置する必 要があり、和歌山城からの景観に配慮して、すべてのエレベーターに油圧式 が採用されたと聞く。しかし今は機械室が不要なロープ式がトレンドで、関 東地方なら油圧式でも緊急時に駆けつけられるメーカーが存在するが、和 歌山では見つからず、ロープ式を導入するしかほかに選択肢がなかった。そ してロープ式エレベーターを支えるためには鉄骨柱の補強追加が必要と なった。また、籠内部の角にはノスタルジックな感の曲げたガラスがはめられ ていたが、その再現は叶わず、乗り場側のガラス扉のガラス面もひとまわり小 さくなった。これらによってシースルーの要素は減ることになった【図1・2】。

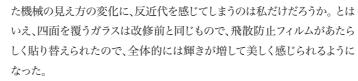
また改修前の籠の扉や内壁はアルミやステンレスの自然発色が活かさ れ、それに合わせて微細な部分がメタリック塗装で仕上げられていたのだ が、今回は内壁にメタリックに見えるシートが貼られ、ガラス越しに見える機 械にメタリック塗装部が増えた。印象の統一感は守られたものの、塗装に 残った刷毛あとを見つけてしまうと、作為を感じていささか興ざめではある。 そしてエレベーターが動くための心臓部にあたる機械は、平たい金属ケース の中に隠されてしまった。保護や安全のために必要なものとはいえ、そうし



図1 鉄骨柱の数、油圧式とロープ式の違い(左:改修前/右:改修後)



図2 籠内のガラス(左:改修前/右:改修後)



細部を見ていくと、中銀カプセルをはじめ黒川建築に特長的な丸窓は残 すことができたが、やや小さくなり、その部分をつなぐビスが目立つなど全体 の形状がかなり変わった。開閉時に籠の上部で大きく回っていた歯車もな くなったため、「お目々」や「人体」などとイマジネーションをかき立てて愛嬌 を醸していた扉の動きが、無機質で直線的なものに変化した【図3】。

また、大きく変わったのは籠の内部に車椅子等での確認がしやすいように 鏡が設置されたことである【図4】。竣工時に鏡が設置されなかったのは、法 規の違いと、補助や誘導が必要な人に対しては近くにいる受付スタッフが対 応するように想定されていたこと(曲がったガラスから内部の様子もわかりやすかった)、 そして美術館を訪れた人が非日常的な空間を楽しんでいる時に、鏡に映っ た自分の姿を見ると一瞬で現実に引き戻されてしまうのを回避した、という 理由があったのを改めて知った。三年坂通りから石の階段をあがり、大庇 を経て美術館内に入り展示室へ向かうまで、明るい外から暗い展示室内へ と徐々に明るさが変化し、非日常を楽しむために動線を考えられた美術館で ある。そんな空間に合わせて、エレベーターも考えられていたのだった。

もうひとつ記しておくべきなのは、この機会に2階乗り場の床とエレベー ター側の構造体の連結部があらためて補強されたことである。そのために、 テラゾー(人造大理石)を除去しなければならず、その部分には新しいテラゾー が設置された。何度も種石の形状や色を変えて試作し、現場での確認をし たうえで設置されたが、仕上がるとその違いはやはり分かる。建築物の修復



図3 扉など籠の変化(左:改修前/右:改修後)



の難しさを感じ、美術品の修復家の方々の調色感覚と技術力の高さをあら ためて知る機会となった。

良くなったと思われる部分ももちろんある。押しボタンは押したときの光 が電球からLEDになったが、試験機を用いて色の調整が繰り返し行われ、 電球の時とはまた違う新たな魅力が生まれている【図5】。 点字をアルミに打 ち出した操作盤、手摺り、目的階に着いたことを知らせるベル、天井などは、 細部まで配慮されているので多くの方々にぜひ見ていただきたい。

改修前のエレベーターのパーツは一部ではあるが保管してある。写真家 の厚意により写真や動画での記録も実現した。

また、4か月におよぶ休館中、ふだんは展示室で監視業務を担っているス タッフと共に、展示室内の除菌清掃、壁補修、数百点に及ぶ版画作品の仕 分け、撮影、採寸、保存用紙のセット、入力、さらには額出し、古い額の水貼り テープ除去といった作業まで一緒に行った【図6】。高所に展示してあった 7.6メートルのフランク・ステラ作品を工事のため下ろさねばならなかった が、その機会に修復家による詳細な状態調査を実施し、ホコリ除去の手伝 いもしてもらった。採寸の場面ともなれば、ポケットから「マイ・メジャー」を さっと取り出すようになった姿は心強く、いつもは額やケースの中にある作品 を間近に見られる機会を、素直に喜んでくれたスタッフのみなさんを、美術 館員のひとりとして誇りに思うことができた。

竣工から30年を経て、今後も建築や設備の修繕・改修は続き、もしかする と終わることがないのかもしれない。だが、不断の努力と工夫で大切にメン テナンスを続けることが、ほかの収蔵品と同様に、美術館としての存在価値 を高めることになるに違いない。

(井上芳子)

6 | 和歌山県立近代美術館ニュース n°119 和歌山県立近代美術館ニュース n°119 | 7